

追悼ミサにおける説教

聖心女子大学学長 高祖敏明

本日の追悼ミサは、ご案内のとおり聖心女子大学同窓会と聖心女子大学との合同で営んでおります。新型コロナウイルス感染症の感染予防のため参列者の人数も大きく制限せざるを得なかったのですが、例年どおり、この1年の間の物故者の内ご遺族と連絡が取れ、ミサの中での呼名を望まれた方のお名前は、ミサの初めに紹介していただきました。

お一人おひとりの名前を呼ぶように読み上げられましたが、それはフランシスコ教皇がよく言われるように、人間は数字に置き換えられるものではなく、一人ひとり自分の顔と自分の名を持った存在であるからです。教皇は同時に、一人ひとりが自分を語る物語を持っている独自の存在だともおっしゃっています。本日追悼するお一人おひとりの顔、とりわけ交わりのあった方のことを思い浮かべ、その生き抜いた人生に思いを重ねながら、神様の御許でのご冥福をお祈りいたしましょう。

亡くなられた人の中に、シスター和田町子名誉教授がおられます。実はシスターと私は、上智大学文学部哲学科を1971年3月に一緒に卒業した同期生です。シスターはドイツ哲学専攻、私はスコラ哲学専攻で、シスターは学科の総代として当時の守屋美賀雄学長から卒業証書を受けられました。もう50年も前のことですが、今、はにかんだようなシスターの笑顔を懐かしく思い出しています。

昨年10月22日に逝去された緒方貞子先生の葬儀ミサは、この大学聖堂で1年ほど前に営まれました。先日、1周忌を記念してNHKテレビ「ニュースウオッチ9」が特集を組み、本学の学生にもインタビューして、先生の志が受け継がれていることを伝えていました。番組の中で先生が語られた、「人間社会は持ちつ持たれつで、助け合って生きていくのが自然なのです」とのお言葉が心に残っています。

さきほど、「一人ひとりが自分を語る物語を持っている」と言いましたが、シェークスピアは「この世は舞台、人はみな役者」と、劇作家らしい言い回しでこれを言い当てています。

演劇に関連して、現在も活躍されている著名な俳優に梅沢富美男さんがいます。旅芸人の子として生まれ、日本全国を、演劇を上演しながら回るという経験をされた方で、女形役者として有名になり、今はテレビで、舞台上で大活躍されています。この梅沢さんが「演劇を上演していて一番うれしかったことは？」と聞かれて、こう答えたと言っています。

東北のある町で舞台を終えて楽屋に戻ったとき、町長がお礼の挨拶に来て、「梅沢さん、梅沢さんの演劇が終わって、観客の忘れ物で一番多いものは何だと思いますか」と尋ねる。少し考えて「傘ですか」と答えると、「いえ、それが杖なんです。杖を突いて歩いてきた人が、梅沢さんの舞台から元気ももらい、杖を忘れて帰っていくのです」と説明してくれた。

これが今でも一番うれしかったことです、と。

この世という舞台での役回りを終えた、本日追悼している方々も、私たちのもとに、いろいろな意味で支えとなった「杖」を残して旅立っていきました。

例えば、5日前に94歳で亡くなられた小柴昌俊さん。観測装置「カムイオカンデ」を用いて素粒子ニュートリノを世界で初めて捉え、2002年のノーベル物理学賞を受賞した方ですが、若き日の大学生時代、ある中学校で講師として教えた経験をお持ちです。その折、物理学の期末試験に「この世の中に摩擦がなければどうなるか」という問題を出したそうです。

走っている車が止まれない、そもそも人が歩くこともできない、などが浮かんでいきますが、小柴さんが想定した満点回答は白紙答案でした。なぜなら、摩擦がなければ字が書けない。よって、答案は書けないのだから白紙が回答だというのです。小柴さんは、また、何度も挫折したご自分の経験を踏まえて、子供たちには「心に夢の卵を持ってほしい」と、機会があれば語り掛けていたそうです。

この世での役回りを終えて旅立った人は、このようなエピソードや物語という杖を残して行ったわけですが、では、どこに行ったのでしょうか。ご遺体は焼かれて灰になります。聖書も、「人よ、あなたはチリから生まれたのだから、チリに戻ることを覚えておきなさい」と諭しています。

しかし、聖書は同時に、「信じる者にとって死は滅びではなく、新たないのちへの門であり、地上の生活を終わった後も、天に永遠のすみかが備えられています」と、新しい希望も教えています。この「永遠のすみか」はイエス様が用意して私たちに与えてくださるもので、さきほど拝読したヨハネ福音書は、「私の父の家には住む所がたくさんある…行ってあなたの方のために場所を用意したら、戻って来て、あなた方を私のもとに迎える。こうして、私のいる所に、あなた方もいることになる」(14章2-3節)と、イエス様が最後の晩餐の席上で、弟子たちに語った言葉を伝えています。

この「永遠のすみか」のありさまを、第1朗読(ヨハネの黙示)はこう描写しています。

「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく、ぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものが過ぎ去ったからである」と(21章3b-4節)。

イエス様が、聖書にその到来が約束された救い主キリストであると信じる私どもは、イエス様をご自分の生涯を賭して、地上の生活と永遠のすみかとの間に橋を架けて両者をつなぎ、「もはや死のない」場所を用意して下さったと信じています。今と一緒に祝っているミサ、とりわけこの後続く「パンとブドウ酒の祭儀」は、そのご生涯のクライマックス、つまり、最後の晩餐、捕縛と死刑判決、十字架上の死、そして父なる神の力による復活、父のもとへの昇天を記念する祈りであり、「永遠のすみか」への道を拓き、自らの命に

私たちを与らせてくださることへの感謝を捧げる祭りです。

こうして永遠の死、永遠の滅びから「不滅の希望」へと私たちを率いてくださるイエス様は、さきの朗読で聞いたように、「私は道であり、真理であり、命である。私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」(ヨハネ福音書 14 章 6 節) と言われます。ですから、ミサを捧げて物故者を追悼するのは、イエス様が切り開き、橋を架けて用意してくださった「永遠のすみか」に、この方々を受け入れていただくために祈る一方、すでに受け入れていただいていることを思い起して感謝するために他なりません。

それと同時に、ミサに与って死者のご冥福を祈っている私たちも、この「永遠のすみか」、
「神の幕屋」に住むよう招かれています。その意味では、追悼している私たち自身もミサを通して「不滅の希望」を新たにし、今日を、明日を生きる力をいただくことができます。ミサは、その意味での感謝の祭りでもあります。

本日追悼している方々が私たちに残して行った、いろいろなエピソードや物語という杖を思い起しながら、何重もの意味を持つ感謝の祈りを捧げ、パンとブドウ酒の感謝の祭りを続けてまいりましょう。